２０２１年１２月２５日降誕日

イザヤ書 52 章 7-10 節
ヘブライ人への手紙 1 章 1-12 節
ヨハネによる福音書 1 章 1-14 節

クリスマスおめでとうございます。従来通りの東京聖三一教会の降誕日の礼拝とは異なりますが、皆様とご一緒に主イエス・キリストのご降誕をお祝いできますこと、心から主なる神様に感謝したいと思います。

さて、イエス様の誕生物語・クリスマスの物語は、「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」にしかありません。歴史的に一番古い伝承を残している、パウロの手紙と「マルコによる福音書」には記されていません。パウロや「マルコによる福音書」の著者が、イエス様の誕生の事情について、知っていたのかどうかはわかりませんが、「聖鐘」の最新号の巻頭言に記しました通り、「マルコによる福音書」には、イエス様の誕生に関するヒントのような記述はあります（マルコ６：1-6)。

本日の福音書である、「ヨハネによる福音書」は、歴史的には４つの正典福音書のうちで、最後に書かれた福音書ですが、そこにもイエス様の誕生物語はありません。ただし、「ヨハネによる福音書」の著者が、マタイやルカの物語を知らなかったわけではないと思います。おそらく、「ヨハネによる福音書」の著者は、クリスマスの物語をあえて書かなかったのだと思います。それはイエス様が誕生した意味を、単に神の子の誕生と考えたのではなく、もっと大きな視点でとらえたからです。本日は、この「ヨハネによる福音書」からクリスマスについて学びたいと思います。

「ヨハネによる福音書」の始まりは、とても不思議な書き出しで始まります。「**初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった**」（ヨハネ１：1)。ここに記されている「言」とは、イエス様のことです。つまり「ヨハネによる福音書」は、イエス様がこの世界の最初から存在していたと冒頭に記しているのです。その記述をイエス様の誕生・クリスマスと関連させるならば、「ヨハネによる福音書」においてイエス様の誕生・クリスマスとは、イエス様が世界の初めからおられることが、明確になったことを意味しています。その意味で、『聖書』（新約）のほかの文書と観点が大きく異なっています。

イエス様をメシア・キリストと信じる人々（ユダヤ人にも異邦人にも）に宣教し、また手紙も書いたパウロ、十字架で死んで復活したメシア・キリストの物語を最初に書いた「マルコによる福音書」の著者、そしてイエス様の誕生の物語を詳しく書いたマタイとルカ福音書の著者も、詳しい記述があるかないかは別にしても、イエス様の誕生とは、歴史の中の事柄であると捉えていたと思います。イエス様は、空想や神話上の人物ではありませんから、その存在、またその出来事を、歴史上の事柄であるととらえることは、大切です。しかし、

「ヨハネによる福音書」の著者の観点は異なります。

「ヨハネによる福音書」の著者は、それらのことを踏まえつつも、イエス様の存在は、天地創造の初めからであり、イエス様が活動された意味とは、天地創造の初めからある主なる神様の意志を、明らかすることであるととらえたのです。クリスマスと関連させるならば、それらすべてが明らかになったのが、イエス様の誕生にほかなりません。逆に言えば、イエス様の誕生とは、イエス様がその時に誕生された方ではないことが明らかになったということです。それゆえに、「ヨハネによる福音書」は、マタイやルカにあるクリスマスの物語ではなく、本日の箇所のような始まりとなったのです。その意味では、「ヨハネによる福音書」の冒頭の記述が、『聖書』（旧約そして新約の一部）全体を通して、もっともクリスマスの意味を明確にしているといえると思います。

イエス様が「言」として天地創造の初めからおられると語るがゆえに、「ヨハネによる福音書」は、イエス様が、主なる神様と最初から一体であることを語ります。また、天地創造の出来事に関与される方であるとも語ります。主なる神様は唯一であるからです。「**この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。**」（ヨハネ１：2-3）とある通りです。

これらの主張は、時間と空間を超えており、それまで存在した『聖書』（旧約）を、全く異なる新しい視点で見ているとも言えます。それゆえに、「ヨハネによる福音書」は、「**言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった**」（ヨハネ１：4-5）と語り、「言」の内に「命」があり、その「命」は人間を照らす「光」であるとも主張します。「命」は、その起源が主なる神様にあり、当然イエス様がこの地上に誕生する（登場する）以前から『聖書』（旧約）において存在しまた大切なものでした。また「光」も『聖書』（旧約）の最初から存在していました。それゆえに、この地上に現れたイエス様にこそ、まことの「命」があり、またまことの「光」であると主張されるのです。

なんとも、わかりやすいようでわかりにくい事柄ですが、「ヨハネによる福音書」は、さらにそのことを洗礼者ヨハネの出来事と結び付けて裏付けます。「**神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。彼は光ではなく、光について証しをするために来た。**」（ヨハネ１：6-8）という箇所です。そこでは、過去に存在した歴史的な人物である洗礼者ヨハネは、主なる神様から遣わされた方であるが、イエス様を光であると証しするために存在したとされています。つまり、洗礼者ヨハネの使命とは、イエス様が天地創造の初めから存在し、まことの光であることを証しすることだと説明しています。歴史的な洗礼者ヨハネに、そのような自覚があったかどうかはわかりません。しかし、「ヨハネによる福音書」で描かれる洗礼者ヨハネの存在意義は、そこにあるのです。

「ヨハネによる福音書」は、「**その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。**」（ヨハネ１：9-11）と、再度イエス様がまことの「光」であることを語り、またそのことを受け入れなかった人々（自分の民）がいることを語ります。それは、契約という制度上神の民であるイスラエルです。「ヨハネによる福音書」は彼らを「ユダヤ人」と表現します。ただし、この「自分の民」が言葉を認めなかったこと自体を、普遍的にとらえるべきではありません。「ヨハネによる福音書」が書かれた時代においては、ほとんどの人々が、イエス様がまことの「光」であることを受け入れなかったからです。ユダヤ教を信じる人々以外、多くの異邦人も受け入れなかったと思われます。しかし、もともと『聖書』（旧約）の民である人々が、受け入れなかったがゆえに、このように特記されているのです。大切なのは、受け入れなかった人々の存在を記すことではありません。受け入れた人々に対する主なる神様の「恵み」です。

それゆえに、「**言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。**」（ヨハネ１：12-13）と語られます。イエス様がまことの「光」であることをはじめとして、イエス様についての事柄を受け入れた人々は、様々な文化的・歴史的なつながりを超えて、「神の子」となる資格を与えられるという主張です。ここで「神の子」と訳されている「子」という言葉ですが、それは「神の子イエス・キリスト」という表現にある「子」とは言葉が異なります。また複数形です。イエス様を受け入れた人は、イエス様と同じ「神の子」になるという意味ではありません。制度上・契約上の「神の子孫」になるという意味です。それゆえに、「**血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく**」、と表現されるのです。そして「**神によって生まれた**」（直訳すれば「神から生まれた」）と表現されるのです。つまり、主なる神様がすべて作られたもの、神から生まれたすべてのものに与えようとされた「命」と「光」に満たされている存在になるということです。それが『聖書』（旧約）全体を通して、主なる神様が示そうとしている意志である、それが「神の子となる資格」という表現から受け止めるべき事柄です。教会に集められているわたしたちは、イエス様を信じることを通して、その意思にかなった存在になっているのです。そのことは表現を変えれば、イエス様を信じるとき、わたしたちは、この世（世界）に住んでいる・生きているのですが、「神の子」としてこの世に住んでいない存在でもある、いうならば信仰の世（世界）に住んでいる存在でもあるということです。それらすべてが、すべての人に明確になった出来事が、クリスマスに他ならないのです。

本日の福音書は、最後に「**言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと**

真理とに満ちていた」（ヨハネ１：14）とあります。その「言」が肉となった現れた出来事、すなわちクリスマスの出来事は、主なる神様の「栄光」を示す出来事であり、わたしたちに与えられる主なる神様の「恵み」に満ちており、またわたしたちが知るべき「真理」を示します。最終的にこの「ヨハネによる福音書」の冒頭が語っていることとは、一言でいえば、イエス様を信じることで、すべてが満たされるということにほかなりません。

イエス様を信じる人だけ、天地創造の初めから主なる神様が望んでいた恵みに満たされる、救われる、そのように強調しますと、ユダヤ教やほかの宗教の信仰のあり方を否定するように思えます。あるいは何かを理解しようとする理性的な面を否定しているようにも思えます。しかし、「ヨハネによる福音書」が強調しようとしている事柄は、そのような排他性でも思考停止でもありません。この世界にどのような事柄があったとしても、主なる神様が、イエス様を通して信じる人々をまことの光のもとで守り、恵みを与えて、まことの命へ導くという確信です。この世界で何も信じられないと思ったとしても、また理性的に考えて、どうにもならないと思ってしまったとしても、イエス様を信じる確信から、この地上の日々の歩みに安心を得ることです。

「ヨハネによる福音書」はことに、迫害が始まりつつある時代に書かれたと推測されます。イエス様を信じるようになって、何もかも満たされて思いついた主張ではなく、イエス様を信じるがゆえに、迫害にあり、何もかも失いかねない状況の中で見出された信仰といえます。それゆえに、そこにある信仰による確信は、時間と空間を超えて、大切な事柄であるといえます。

イエス様が登場する前も、それ以後も、そして、「ヨハネによる福音書」が書かれた後も、この世には、苦しみや悲しみが絶えません。現在、わたしたちは、世界史に残る規模の、コロナ禍という出来事に直面しています。わたしたちの住んでいる国は、他国に比べればまだ良いほうかもしれませんが、困難が続いていることに変わりはありません。そして、コロナ禍以外にもわたしたちには、生きている限り苦しみや悩みは尽きないといえます。しかし、本日見た「ヨハネによる福音書」の記述は、そのようなわたしたちに一つの確信を与えます。それは人生の中でどんなことがあっても、イエス様を信じている限り、すでに主なる神様の子として、新しい世界に生きている、だから何の心配もないという確信です。その確信の誕生がクリスマスです。

教会が誕生して約２０００年近い歴史があります。わたしたちの教会も１３０年を超える歴史を歩んでいます。それだけ時間が経過しても、世界は変わらないという見方もありますが、それだけ長い間、イエス様を信じて歩んできた信仰の先輩たちがおられるということでもあります。そして、だからこそわたしたちは、今年もクリスマスを祝う礼拝をしているのです。これからもそのクリスマスの意味を共に信じ続けたい、また語り続けたいと思います。